

「文章の書き方」「自分史の書き方」等々

加藤迪男 フリーライター

30年余の新聞記者生活を終えて、執筆に意欲的に取り組んでいます。この3年半に5冊を出版しましたが、そのほかに次のようなテーマの原稿が仕上がっています。企画として取り上げていただけるとことはありませんか。

- ①「文章の書き方」……カルチャースクールで担当している「文章講座」のテキストとして書き上げたオリジナルのもので、文章を書くときの基本的な約束ごとなどを丁寧に解説して、正しい文章を書くためのノウハウがわかるような内容になっています。
- ②「自分史の書き方」……こちらもカルチャースクールのテキストとして書き下ろしたもので、若い人から高齢者まで気軽に取り組める自分史

の書き方を説いたものです。書きたいことのまとめ方から編集の仕方、自費出版にこだわらない手づくりで世界に一冊しかない自分史を完成させるコツなど、具体的に説明してあります。

- ③「自分史ノート」……自分史をまとめるにあたって自らの歴史を記録しておく記入式のノートです。昭和元年から現在までに起きた世相、流行歌、流行語、映画、書籍、物故者などを年別に記述してあるので、それに対応して個人の情報を書き込めるようになっていきます。家庭や個人の記録や備忘録としても活用できます。②とセットになります。
- ④「実年のための男性学」……定年になってからあわてないための先輩からのアドバイス

です。生涯学習で学ぶ(教える)こととボランティア活動への参加を中心にして、どのようなもので、どのように準備したらいいかわかるような内容です。

⑤「岐阜県の十二支」……十二支に充てられている動物にちなんだり関連する地名、神社、祭り、天然記念物、名字など岐阜県内にあるものを訪ね歩いて

ポール・ド・マンへの思い

土田知則 フランス文学・文学理論

私がこれまでに書いてきたものはおおよそ次の二つに分類できる。一つはフランス文学などのテクストを分析する専門的な

論考、そしてもう一つは文学理論の諸問題を論じる理論的な著作である。『ブルースト 反転するトポス』(新曜社、1999年)は前者に属するし、『現代文学理論』(共著、新曜社、1996年)、近刊予定の『呼び交わすテクスト/呼び交わす

写真で紹介する内容です。レジャー情報としても活用できま

す。地方出版の範疇になるのかも知れません。この他に「十二支の旅」という雑誌向けの構想を持っています。十二支と旅とをドッキングさせて全国の十二支を訪ね歩く企画(月1回ずつで12回)です。

読み(仮題、夏目書房)、『現代文学理論 実践編』(新曜社)は後者に属すると言えるだろう。

さて、今後の課題であるが、書いてみたいテーマや本は山ほどある。研究書のような大部でハードな本を出すのもよいが、それと並行して新書版程度の紙幅で今気になっているテーマを自由に書ける機会があれば、と願っている。推理小説、メタフィクション、国内外の現代小説、文学理論など、取り上げてみたいテーマは数限りない。

うやく完成される書物というものがあるてもよいだろう。私の場合、常に念頭にあるのは「イェール学派」の中心的な人物であったポール・ド・マンについて書くことである。20世紀の文学理論家ベスト3を挙げなさいと言われたら、私はミハイル・バフチン、罗兰・バルトの名とともに、躊躇なくド・マンの名を挙げるであろう。パフチン、バルトに関しては既にある余るほどの紹介書、研究書が出版されている。それに対して、ド・マンについてのまとまった書物はほとんど皆無と言ってよいだろう。著作の邦訳についても、主著とされる2冊の書物(『盲点と洞察』、『読むことのアレゴリー』)が依然未訳のままである。

ド・マンの文章は含蓄に富み、決して読み易いものとは言えない。また、総合的な研究となれば、彼が若い頃に執筆した新聞記事なども大量に読破する必要が生じるだろう。優に5、6年かかる仕事である。私のド・マン論への思いははたして実現するであろうか。



書きたいテーマ・出したい本



を据え、長い準備期間を経てよ